

デカルト哲学が持つ普遍性とは何か？

－ デカルト道徳論とジェンダー －

柿本佳美(奈良女子大学非常勤講師)

本報告では、ジェンダーの視点からデカルト道徳論の形成を産み出したファルツ選帝侯エリザベトとの往復書簡および『情念論』を読み直すことで、デカルトの道徳論が社会階層やジェンダーを越えて支持された理由を探る。

近年、デカルトの哲学をジェンダーの視点から読み直す研究が進んでいる。ロディス＝レヴィスによる研究は、デカルト研究はもちろんのこと、デカルトとフェミニズムの関係を知らなくても今なお重要である。また、コレズニック＝アントワーヌとペルグランが編集した *Elisabeth de Bohême face à Descartes: Deux philosophes?* (Vrin, 2014) は、デカルトとの往復書簡で知られるファルツ選帝侯エリザベトを哲学者として再評価する試みである。

17 世紀は、学問に情熱を傾けた女性たち、そして両性間の平等の必要性を認識する男性知識人たちが現れた時代であった。モンテーニュから信頼を受け、彼の死後『エッセー』を再編纂したマリ・ド・グルネーは、17 世紀前半の女性知識人の一人であった。デカルトとの文通で知られるエリザベト王女は、言うまでもない。エリザベトの友人であったアンヌマリ・ド・シュルマンは、ポエティウスに取り込まれてしまって宗教の議論しかしなくなった(メルセヌ宛 11 月 11 日付書簡, AT-III, p.231) とデカルトから嘆かれたが、当時の女性知識人ネットワークを構成する一人であった。17 世紀後半に入ると、デカルト哲学に根差した両性の平等に関心を寄せる男性知識人が現れる。フェミニズムの先駆けともいえる『両性平等論』(1673)をはじめとするプーラン・ド・ラ・パール著作やジル・メナージュ『女性哲学者の歴史』(1690)等は、デカルト道徳論の流行のなかで生まれたものであった。両性の平等の思想的基盤としてのデカルト哲学という切り口は、デカルトの思想にはジェンダーや階層を超える普遍性があるということ、そしてそれが現代の民主主義を支える「平等」概念につながるものであるということを示しているように思われる。

「平等」は、『方法序説』冒頭の「良識とは万人に公平に分かたれたものである」という一文に示されるように、デカルトの道徳論の特徴のひとつである。この一文がジルソンの指摘通りにモンテーニュ『エッセー』由来であるにせよ、誰も「良識」を持っているとする見解は、信仰する宗派、社会階層、身体的差異、言語、ジェンダー等に関わりなく、この試論でこれから示される真理の認識にどのひとつであっても到達しようという揺るぎのない確信のもとになされている。そして、真理探求にあたっての 4 つの規則のうち「自分が明晰に真であると認識するものしか真として受け入れない」(AT-VI, p.8) という第一規則に照らして、感覚を介して得られた認識、数学の推論、これまで自分が受け入れてきた意見を疑うなかで見出した「私は考える、ゆえに私は存在する」は、真理追求のための第一原理となる。

この方法的懐疑の過程において証明されるのは、「思惟する実体」である「私の精神」のみであって、身体を含む物体の存在は神の存在証明を待たなければならない。もちろん、コギトは、神の存在証明のための第一原理であり、そして何より神の存在が証明されてはじめて、「私の精神」もまた神の被造物であることが示されるという点で、神の秩序のなかに回収されてしまう。とはいえ、社会階層やジェンダーなどさまざまな差異を表象する物体的存在なのであって、「思惟する実体」の発見は、この世

界における秩序とは別に存在する、神の秩序のなかにある人間の発見となりうる。

デカルトの初期の著作が示す人間理性への信頼は、『情念論』にいたるまで一貫しているように見える。とはいえ、『方法序説』および『省察』での神の創造した秩序のなかの被造物としての人間という形而上学に基づく見解は、プロテスタントの信仰をもつエリザベトとの往復書簡においては、背後に退く。その代わり、デカルトがエリザベトとの書簡で論じるのは、身体をもってこの世界に生きる人間の生と幸福である。

エリザベトが往復書簡のなかでデカルトに問いただすのは、精神と身体との関係(1643 年 5 月 16 日付デカルト宛書簡、同年 6 月 20 日付デカルト宛書簡、同年 7 月 1 日付デカルト宛書簡)、そして理性的能力を失った状態にある人間にとっての至福の問題(1645 年 6 月 22 日付デカルト宛書簡、同年 8 月 16 日付デカルト宛書簡、同年 9 月 13 日付デカルト宛書簡)である。エリザベトの短い書簡からは、人間が常に理性的能力を行使できる状態にあるとは限らないという認識のもと、彼女が非物質である精神と部隊的存在である身体との関係を知ることで魂を救済する道を探りたいという意志が見えてくる。エリザベトの問いに対してデカルトが示したのは自らの情念を理性によってコントロールすることで心穏やかにするという忠告であった、これらの往復書簡は、後に『情念論』に結実する。

『情念論』における「高邁」の情念は、自らに自由意志があると知って自らを尊重することと自由意志の善用への決意(『情念論』第 153 項)である。ここには精神と身体との結合体である人間にとっての情念という視点はあっても、身体がつくりだす差異の問題は入ってこない。むしろ、どのひとつでも自らの意志の自由が自己尊重の根拠であるとするひとならば到達可能な情念であり、そしてこの情念こそが他の人を軽蔑したり不首尾を責めたりすることから遠ざけ、他者を尊重することを可能にする(第 154 項)。言い換えると、「高邁」の情念は、自己と他者を尊重する情念である。「私が属する性の弱さの大きな部分がしみ込んだ身体」(1645 年 5 月 24 日付デカルト宛エリザベト書簡)を持つ女性たちもまた、自らのうちなる自由意志を認識し、それを善用することができるということになる。

17 世紀には、デカルト以外にも優れた思想家は存在する。しかし、それらが影響力を持ち続けなかったいっぽうで、なぜ彼の思想が現代の人間観にも影響を与え続けているのかを問うならば、神の世界創造に基づく形而上学を「根」としながらも宗教対立からは距離を置き、女性を含む周縁化されたひとつ「実体」として「人間の概念に包摂されるからではないだろうか。

ジェンダーという視点からのデカルト哲学の再検討は、デカルト哲学における普遍性を改めて浮き彫りにすると言えるだろう。